

◇拠点形成概要

機 関 名	京都大学
拠点のプログラム名称	知識循環社会のための情報学教育研究拠点
中核となる専攻等名	情報学研究科社会情報学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 田中 克己 教授 外 17 名

〔拠点形成の目的〕

本拠点形成の目的は、「知識循環社会」を支える情報科学技術の研究を通じて当該分野の人材育成を行う国際的な教育研究拠点を形成することである。「知識循環する社会を拓く情報科学技術」の教育研究に目標を絞って、多領域の融合により生まれた京都大学情報学研究科を中心に、新たな学問分野の開拓を目指す。

〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

知識循環を促進するための核となる情報科学技術で重要なものは、知識伝達のためのヒューマンインターフェイス、信頼性の高い知識の探索、実フィールドにおける知識共有を基盤とするコラボレーション、および、これらを高速高信頼で支える計算基盤であることとらえ、これらの教育研究を、(1)原初知識モデル、(2)フ



ィールド情報学、(3)知識サーチ、(4)知識グリッドコンピューティングという四層構造の教育研究コア組織のもとで推進する。各教育研究コアは、類似分野の研究者を結集したものではなく、各々、(1)情報学・脳科学・生命科学、(2)情報学・実社会フィールド、(3)情報学・管理科学・知財学、(4)アルゴリズム理論・高速計算基盤の分野連携に基づくものである。

原初知識モデルコアは、コミュニケーションにおける知識モデルを探索し、一層の人間理解にもとづくヒューマンインターフェイスや知識創成について教育研究を行う。フィールド情報学コアは、フィールドとのコラボレーションに基づく社会情報システム構築の方法論の確立を目指して教育研究を推進する。知識サーチコアは、種々の情報資源から信頼出来る知識を探索(サーチ)する新しいサーチ技術と、これに関連する社会制度・ビジネスモデルの教育研究を推進する。知識グリッドコンピューティングコアでは、これらを支えるための高速高信頼な計算サービス基盤の構築に関する教育研究を推進する。これらのコアを相互連携させる形で、「知識循環を促す情報科学技術」に関する世界最高水準の国際教育研究拠点の形成を目指す。

人材育成に関する主なプログラムは以下の通りである。

- ① 若手リーダーシップ養成プログラム：若手研究者や博士学生を主な対象として、研究プロジェクト・ワークショップ開催などを競争的に提案させ、事業推進担当者やアドバイザーのもとで遂行させることにより、リーダーシップと国際的な人的ネットワークを有する人材の育成を図る。
- ② 戦略的コミュニケーションスキル向上セミナー：コミュニケーション能力の向上を目的として、若手研究者や博士学生を主な対象にして、日英両国語によるプレゼンテーションや交渉の訓練やカリキュラム開発を、連携実績のある企業等と協力して行う。
- ③ 複数アドバイザー制度：指導教員以外の学内外の教員・研究者やフィールドの専門家などに博士学生のアドバイザーとして研究指導を依頼し、研究評価を多面的に行える人材の育成を行う。
- ④ 海外拠点の充実と博士留学生経済支援プログラム  
欧米やアジアの海外拠点・国際共同研究先を通じて人的交流・人材育成を推進するとともに、若手研究者・博士学生の派遣、海外からのポスドクの招聘・研修学生受入、外国人博士学生の経済支援等を行うほか、日本人博士学生の経済的支援をRA任用等によって行う。
- ⑤ 教育研究コアにおける分野融合型プロジェクト：本GCOEで設置した各コア自身が複数分野が融合したものであるため、各コアで大学院生や若手研究者を対象とした分野融合型セミナー・ワークショップを実施する。

本拠点形成の目的遂行のため、四層構造の教育研究コア組織のもとで推進しており、計画通り着実に進展している。情報学における新しい学問領域の開拓については、米国大学の情報スクールとの連携、情報の信頼性に関する新しい研究分野の開拓と国際的な情報発信(知識サーチ)、新たな学問領域であるフィールド情報学の教科書刊行などを行った。人材育成プログラム推進では、本GOEによる講義9科目や複数アドバイザー制度の研究科教育カリキュラムへの系統的な組み込み、GCOE雇用若手教員の教育への参画、戦略的コミュニケーションセミナー実施、GCOEコアセミナーの実施とセミナー講演アーカイブの作成、若手リーダーシップ養成プログラム(「海外武者修行プログラム」含む)による博士学生や若手研究者への研究費支給、研究科留学生特別配置プログラムとの連携による留学生博士学生の獲得などを実施し効果をあげている。結果として、学生の論文数、学生・GCOE若手研究者の受賞・表彰数、学生・GCOE若手研究者自身の研究費獲得、学振研究員採択状況等に改善が見られる。

## ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

### (総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

### (コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、中期計画や国際戦略において、本グローバルCOEプログラムを明確に位置付けており、評価できる。

拠点形成全体については、新たな学問分野であるフィールド情報学に関して、教科書を刊行して啓蒙に努めていること、4層構造の教育研究コア組織を体系化するなど新しい試みを進めていることは評価できる。しかし、知識サーチと知識グリッドコンピューティングの連携は見えやすいが、肝心の「原初知識モデル」と「フィールド情報学」との連携が概念的で明確になっていない。

人材育成面については、大学院学生の自立した研究を支援する若手リーダーシップ養成プログラムを実施し、採択者に研究費を与えるだけでなく、中間審査と最終審査において、個別アドバイスを与えていることは効果が期待され、また、大学院学生が独自に交渉してアドバイザを決める複数アドバイザ制度も斬新で、単にアドバイザの制度を導入しただけではなく、年に2回の報告を義務付けている点は評価でき、効果が期待される。

研究活動面については、知識サーチと知識グリッドコンピューティングにおいては、国際的な活動が活発であり、独創的な研究が行われ、国際的に評価の高い研究成果も多数得られているが、原初知識モデルとフィールド情報学においては今後の努力が期待される。また、事業推進担当者の国際会議での発表の面において、重要な会議での基調講演及び一人当たりの発表件数については十分とは言えず、レフェリー付きの学術雑誌等への研究論文発表状況においても、国内の学会誌が3分の1を超えるなど、国際性の面で改善が期待される。更に、今後、コア間の連携についても多くの努力が期待される。

補助金の適切かつ効果的使用については、概ね妥当であり、RA雇用単価の増額獲得は評価できる。

今後の展望については、本プログラムにおいて知識循環型を提唱しているが、知識サーチ、知識グリッドコンピューティングは、開かれた環境の下においてのボランティア開発パワーが圧倒的に大きく、それらに対抗して新規性を打ち出すには、上位2テーマからの有効なフィードバックが重要であり、各層間の循環、特に上位2テーマと知識サーチとの関係がまだ十分とは言えず、知識循環が一般の人にも明確に伝わるようにすることが望まれる。そのためには、学内の知を更に結集するなど、連携研究の更なる強化が望まれ、特に、フィールド情報学などでは、社会学、文化人類学の研究者との共同が望ましく、また、海外への進出を積極的に図るべきである。